



新見 正則(著)

『本当に明日から使える漢方薬

— 7 時間速習入門コース —

癌研有明病院消化器内科部長

星野 恵津夫

外科医は単純である。単純であるがゆえに、何が正しく何がまやかしかであるかの白黒をはっきりつける。一旦これが正しいと思えば、180度自分の考えと方向を変えてしまう。そしてその世界にのめり込む。ところが内科医はこうはいかない。「ああなるほどね」と頷きながら、一歩下がって逡巡する。

私の漢方の師である池田和広先生は、日本の脳外科の黎明期に新潟大学で脳外科の臨床研究をされたが、ご自身が肝炎に罹り、一旦は地獄をみたものの、食事、運動と漢方薬で肝炎を克服し、師匠である小倉重成先生とともに、漢方と鍼灸の研究に没頭され、私たちにその本筋を伝授してくださいました。

本書の著者新見先生の歩まれた道筋も、同じようなものであったであろう。10年前までは妖怪とみなしていた漢方が、実はご自身が長年研究してきた最先端の医学も及ばない、治療のパワーを持つことを身をもって体験し、それ以来漢方にのめり込んだ。脳科学者の茂木健一郎氏の「アハ体験」のように、それまで見えなかった世界がみえるようになった。

新見先生は、わずか10年ほどの短い期間で、漢方の本質をがっちりをつかんだ。そして、かつての先生自身のように漢方を胡散臭いとみなす医師たちに、漢方の醍醐味を伝えようと決心した。そのために、「陰陽」や「虚实」などの漢方専門用語を用いるのを極力避け、西洋医学的病名や患者の特徴から漢方薬を処方するコツを伝授することを試みた。本書では、まず西洋医学しか知らない医師に、漢方の

海の渚でチャボチャボ泳ぎ始めることを勧め、その後には漢方の大海原を自由に泳ぎ回るためのノウハウを示した。

始めは「当たらずといえども遠からず」で、漢方薬が的の正鵠を射なくても、その近傍に当たるような漢方薬を投与すれば、患者の症状はある程度改善する。そのうちある日、的の下真ん中に漢方薬が当たった時に、患者の状態は劇的に改善する。その時の震えるような感激は、漢方を真摯に実践した医師だけに与えられるご褒美である。

本書は、食わず嫌いの医師が漢方をおい食べてみたくなるフレーバーとなる不思議な本である。臨床が好きな医師は、一度漢方の味を知り、漢方が好きになってしまえば、あとは自然に実力がついてくる。それまで治せなかった患者や病気がおもしろいように治せるようになる。その結果、ますます臨床が好きになる。

現代の漢方診療では、漢方エキス製剤が用いられる場合が圧倒的に多い。エキス製剤には煎じ薬のような漢方処方自由度は少ないが、逆に煎じ薬に比べて、保存性、携帯性、信頼性、再現性は圧倒的に優れており、EBMの立場からはエキス製剤のみが評価される。本書には(株)ツムラの全面的協力により、頻用される漢方薬および生薬に関する情報が満載されているが、これもまた大変便利にできている。

● B5判／162頁／定価4,200円(本体4,000円＋税5%)

2010年／新興医学出版社刊(営業部 Tel: 03-3816-2853)